

「港猫」

—2 稿—

2024/9/23/
米俵

〈人物表〉

小林 湊 (18) 学生ボランティア

比嘉 レオン (30) 保護猫施設「海猫」代表

平良 颯真 (18) 学生ボランティア

ボランティア

医院長

〈ログライン〉

・猫好きの湊は、レオンの高級車を見たことをきっかけに、レオンの保護活動のやり方に疑問をもち始める

〈ねらい〉

・感情が見える部分を作る

1. 一軒家・玄関(昼)

多頭飼育崩壊現場。木造の一軒家。室内は、猫の糞尿の塊、ゴミ等、床が見えない程散らばっている。

玄関で立ち止まる二人。

小林湊（18）眉間に皺を寄せ、マスクの位置を直す。

平良颯真（18）マスクを押さえて、咳込む。

颯真 「（小声で）湊、想像以上だな……」

湊、颯真の方を見て頷く。

二人の後ろから、

男の声 「おい、早く中入れ」

袖からタトゥーが見えている男。比嘉レオン（30）である。

颯真、慌てて靴を脱いで入ろうとする。

レオン 「靴脱ぐなよ」

颯真 「え？」

レオン、2人の間を抜けて土足で入っていく。

湊、脱ぎかけた靴を履き直す。

レオンの後ろを黙ってついていく湊と颯真。

2. 一軒家・室内(昼)

ゴミの中、端にポツンと置かれた布団。

ケージがいくつか置いてあり、2、3匹の猫が一緒に入っている。

室内の状態を呆然と見ている湊と颯真。

レオン 「おい、どっちかケージに入ってるのキャリアーに移して」

湊、ケージに近付き、作業を始める。

レオン 「あと、写真撮って。ここのヤバさ伝わるようにね」

楽しそうにも聞こえるレオンの声。

湊、手を止めてレオンの方を見る。

颯真 「あ、はい。俺やります」

颯真、スマホを取り出し、写真を撮る。

ボランティア 「あー、こっちに仔猫数匹いますね」

レオン 「とりあえず、手でいけそうなら捕まえて。あとは捕獲機

で」

3. 一軒家・キッチン（昼）

湊、キッチンへ歩いてくる。

数匹の猫が逃げていく。

湊、シンク下の扉を開ける。

猫の死体とその横に白い物体。

湊、そっと死体を撫でる。

湊 「……」

白い物体を手に取り、よく見る。

それが骨だと気付き、ゆっくりと戻す。

レオン、背後から、

レオン 「おー、いいもの見つけたじゃん」

湊、驚いた顔でレオンを見る。

レオン、スマホを取り出す。

湊 「いいものって、どういうことですか」

レオン、写真を撮りながら、

レオン 「あ？ 見るやつが喜びそうなもんでことだよ」

湊 「喜ぶって……」

湊、レオンを睨む。

レオン、湊の顔をチラッと見て、

レオン 「あー……お前、そういう系？」

湊、立ち上がって、

湊 「そういう系ってなんですか？」

レオン 「いや、何でもない。気にしないで」

と、湊の肩を軽く叩いてから、別の場所へ。

湊、レオンの背中をジッと見つめる。

ゆっくりとしゃがみ、死骸に手を合わせる。

シンク下の奥に猫がいることに気付く。

厚手のグローブをはめて、手を入れる。

届かず、体半分をシンク下に入れてゆっくりと引っ

張り出す。

大人しい猫。顔に傷がある。

湊 「大丈夫だから……」

と、優しく声をかけ、キャリーケースに入れる。

4. 車内（昼）

海沿いを走るワンボックスカー。レオンが運転している。荷台には、布をかぶせられたキャリーケースや捕獲機が乗せられている。中からは猫の鳴き声が聞こえる。

湊、頬杖をついて窓の外を見ている。

颯真 「今日のどこエグかったすねー。途中吐きそうになりました」

颯真、自分の服の臭いを嗅ぎ、吐きそうな顔をする。

レオン 「笑って）うちでシャワー入ってけよ」

颯真 「まじっすか？ やった」

颯真、ガッツポーズ。

レオン 「今日は助かった」

颯真 「レオンさんの手伝い出来て嬉しかったっす」

レオン 「颯真だっけ？ 撮ったやつ後で送ってくれる？」

颯真 「はい！ もちろんです」

レオン 「あーっと、後ろの君も……」

バックミラーで湊を確認。

レオン 「撮ってれば、頼むよ」

湊、答えない。

颯真 「湊、なに無視してんだよ。返事しろって」

レオン 「あー、いいよ、いいよ。疲れたんだろ」

湊、携帯でレオンのSNSを確認する。

ボロボロの猫、病気の猫、亡くなった猫などで溢れている。

湊、大きく息を吐いて、目を閉じる。

5. レオンの家・外観（夕）

三階建ての豪邸。大きな庭がある。

駐車場には高級車が2台。

その隣にワンボックスカーが入ってくる。

6. レオンの家の駐車場（夕）

颯真、車から降りる。

颯真に鍵を渡して、

レオン「先にシャワー浴びてていいから」

颯真「えっ、レオンさんは？」

レオン「俺は先にこいつら届けてくる」

颯真「あー。勝手に使っていいんすか？」

レオン「何かすんの？」

颯真「どうですかね」

レオン「警備呼ぶわ」

颯真、笑いながら、

颯真「やめて下さいよ」

座席に座ったままの湊。高級車を見ている。

レオン、湊に向かって、

レオン「君も降りて」

湊「……」

レオン「何かあんの？」

湊「俺も一緒に行きます」

レオン「え？ 病院行くだけだよ」

湊「……」

レオン、湊の様子を確認して、

レオン「まあ、いいや。好きにして」

レオン、エンジンをかける。

7. 車内（夕）

静かな車内。猫の鳴き声だけが聞こえる。

外を見ている湊。

8. 動物病院・玄関前（夕）

こじんまりとした病院。

湊、黙ったままレオンと共に猫たちを玄関前に運ぶ。

レオン「ありがとう。戻ってて」

湊「……」

湊、動かない。

レオン 「なんなのお前。戻ってろって」
病院の医院長出てきて、

医院長 「ね、今回何匹だっけ？」

レオン 「頼みますよー。連絡したじゃないっすか」

湊、一礼して急いで車へ戻る。

9. 車内(夕)

湊、談笑するレオンと医院長の様子を見る。声は聞こえない。

× × ×

海沿いを走っている車。

静まり返る車内。

レオン、重い空気を断ち切るように、

レオン 「何かあるんだろ？」

湊 「……」

レオン 「(茶化すように) 思ってることは言っちゃった方がいいですよ」

湊 「……」

レオン 「まあ、だいたい想像つくけどね」

湊 「(間を置いて) 何ですか？」

レオン 「俺のやり方が気に食わないとかそんなんでしょ」

湊 「……」

レオン 「可哀想を売ってるのか」

湊 「認めるんですか」

レオン 「認めるも何も……売ってるからね」

湊 「よく言えますね」

レオン 「だって、金かかるじゃん」

湊 「個人で働きながらやってる人もいますよ」

レオン 「だから？」

湊 「……」

レオン 「そいつらの何十倍こっちが保護してると思ってるの」

湊 「数が多ければ偉いんですか？」

レオン 「寄付に頼らないのが偉いの？」

湊 「(強めに) そういうことじゃなくて」

湊、レオンの方を覗む。

レオン「何？」

湊、自分を落ち着かせるように呼吸を整える。

湊 「もらったお金って、ちゃんと猫たちに使われてるんですか？」

レオン「そりゃそうですよ」

湊 「さっきの外車は？」

レオン「君に関係ある？」

湊、眉間に皺を寄せ、黙る。

10. レオンの家の駐車場（夜）

レオン、車を停める。

窓を開けて笑い出す。

レオン「お前、なにやってんの？」

玄関前にパンツで佇む颯真。

颯真、車に駆け寄って、

颯真 「レオンさん酷いっすよ」

レオン「（笑いながら）何が」

颯真、鍵を見せて、

颯真 「これ、シャワー室だけじゃないっすか」

レオン「当たり前だろ。初対面の奴に渡すかよ」

颯真 「俺、ずっとこの恰好で待ってたんっすよ」

レオン「知らねーよ。服着ろ」

楽しそうな二人。

浮かない顔の湊。